

和牛子牛、止まらぬ下落

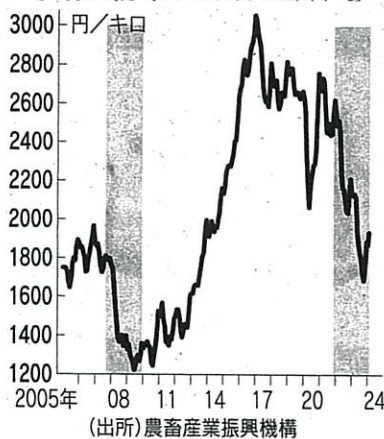
取引価格 28カ月連続、最長に並ぶ

子牛の取引価格が28カ月連続で前年実績を下回り、リーマン・ショック期に記録した過去最長に並んだ。取引の多い黒毛和種の子牛は2月の全国平均が前年同月比9%安だった。生産は高水準だが店頭での牛肉販売が振るわず需給は緩い。値下がり期間は最長を更新する見通しだ。

販売不振で供給過多

相場の低迷長期化を受け、畜産家は子牛生産の「向かう可能性がある」。農畜産業振興機構（東京・港）によると、全国の肉用子牛の取引価格（2月平均）は、黒毛和種が1キログラム1935円。前年同月と比べて9%下落した。2月としては2

子牛相場は21年11月から下落が続く（黒毛和種の全国平均）



子牛は生後6〜10カ月でセリにかけられる（ホクレン十勝地区家畜市場）



和牛出荷までのイメージ



014年以來の安さになった。

前年同月比では21年11月から下落が続く。取引価格のデータを確認できる1994年10月以降、前年同月を下回った水準が最も長く続いたのは2007年9月〜09年12月だ。和牛の需給が緩んでいたところにリーマン・

ショックによる消費の冷え込みが重なった。子牛価格低迷の背景にあるのが、軟調な牛肉市況だ。東京市場で和牛の卸価格は足元で1キログラム2500〜2700円と、新型コロナウイルス禍の前と比べると1割下がった。物価高のなかで、消費者が価格帯の高い肉の購入を控えている。末端の消費が鈍いため、肥育用の子牛の相場も上がらない。

めに、飼っているメスのホルスタインに和牛の受精卵を移植するなどして子牛を生ませて販売するようになった。子牛は一般的に生後8〜10カ月育ててセリの市場に出荷される。競りとされた子牛は、さらに20カ月ほど肥育されて食肉向けに処理される。

と、23年は黒毛和種の子牛の取引頭数が前年比1・7%増の36万7000頭。同機構は、子牛の供給が増えたことなどを踏まえて22年に、調査対象となる「子牛」の定義を狭めている。それでも取引頭数は対象を絞り込む前の09年以來の多さになっている。

足元で子牛は減産へと向かう気配もある。黒毛和種の受精卵などの販売を手がける十勝家畜人工授精所（北海道帯広市）の担当者によると、23年の植村光一郎取締役は「インバウンド（訪日観光客）需要は堅調だが、一般消費者からの引き合いが弱い」と説明する。光客（観光客）需要は堅調だが、一般消費者からの引き合いが弱い」と説明する。

一方、和牛消費はなかなか伸びない。食肉卸、ニイタク（東京・江東）の植村光一郎取締役は「インバウンド（訪日観光客）需要は堅調だが、一般消費者からの引き合いが弱い」と説明する。光客（観光客）需要は堅調だが、一般消費者からの引き合いが弱い」と説明する。